

# 婦人と子ども

第八卷  
第八號

フベール會發行

## 第八卷第八號目次

- 兒童の個性及び其取扱法 松本孝次郎
- 幼兒教育の方法に關する重なる理由とは如何なるものなるか 和田實
- 習慣の理法と幼兒教育 光藤泰次郎
- 成功の幼時 樂天子
- 家庭に於ける趣味の涵養(其二) 川口孫治郎
- 龜の兒頂戴 かはぐち
- 喜多方行 川口得
- かいしいか甘薯 伴茂樹

## 投稿募集

### 一種類

- お伽話 本誌半ヶ年分以上三ヶ年分  
選擇の上本誌に載録せるものは  
内規により原稿料を呈す
- 一般記事

但し右賞品は受賞者の希望に依りて會費と差引き若しくは自ら取  
らすして其指定する人に本會より直接送ることを得

一注意 お伽話及一般は記事一行廿二字詰にて半紙又は郵紙に書  
かれたし原稿は凡て返戻致しません此募集は期限を定めません毎  
月十日迄の分を其月に選評し後は翌月に回はし何時迄も引續いて  
行く積りです。

宛名は本會へ直接御送り下さい。  
開き封で應募原稿と標記すれば三十名迄は郵税二錢で参ります。

### 質問規定

本會は讀者の種々なる質問に應じます。婦人と子供と家庭とに關する  
事なら何でもお尋ね下さい。往復はがきか又は通信料封入ならば早速  
に御答します。公衆に有益だと思ふことは誌上で説明します。

### 入會又ハ購讀手續

本會に御入會なさうとする方は會費一ヶ月金拾錢の割合で一ヶ年  
分をまとめて本會に直接御申込下されば直に登錄して雜誌を發送致  
します。會員にならずに雜誌だけ讀みたい方は左の割合の前金で本會  
か又は賣捌書店へ御便宜御申込下さい

- 一册郵税共金拾一錢
- 六册前金郵税共六拾錢
- 拾二册同金壹圓貳拾錢
- 郵券代用一割増

# 夏期講習會會員諸姉に告ぐ

時下炎暑の候、府下に於ける多くの教育家が暑に苦しみ熱を避けて、東西に其居を移さんとする時に當り或は邊陲の地より或は海外の遠くより續々として聽講の爲めに參集せられ茲に本會豫定の成功を收むるを得たるは深く役員一同の感謝する所に御座候茲に謹んで感謝の意を表し併せて會員諸君の幸福を祈り奉り候敬具

明治四十一年八月

ベフルン會  
幼兒教育夏期講習會

# 會員ヲ募集ス

本會は着實な思想と穩健な主張とを以て真正なる幼兒教育家庭教育を研究して斯界の指導者たらんことを期して居るものであります。

育兒に眞面目なる世の父兄並に幼兒教育に關係せらる

諸君は奮つて御入會御援け下さらんことを懇願致します。

ます。

入會手續等は表紙目錄の下に御座います。

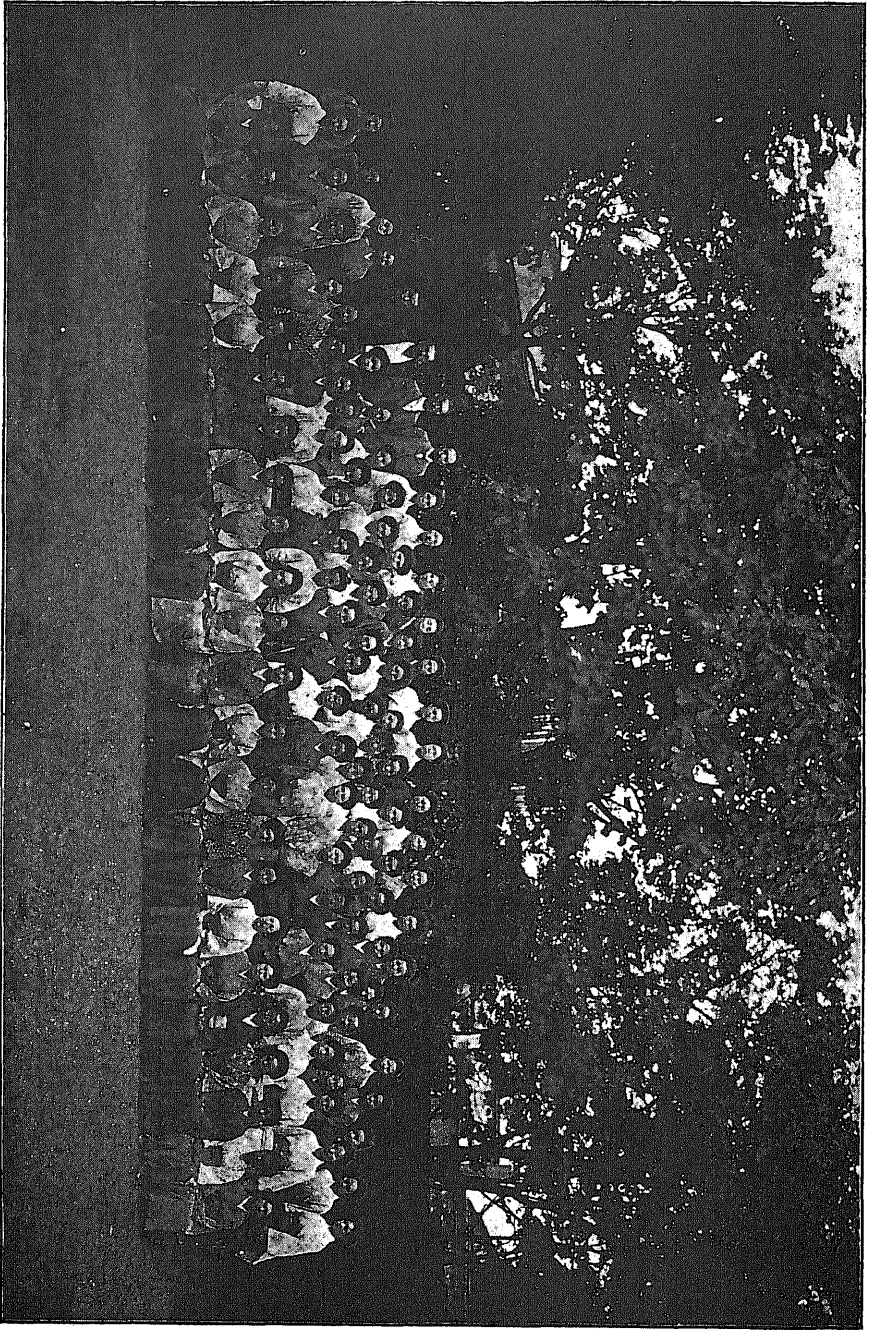
## フレーベル會

### フレーベル會規則

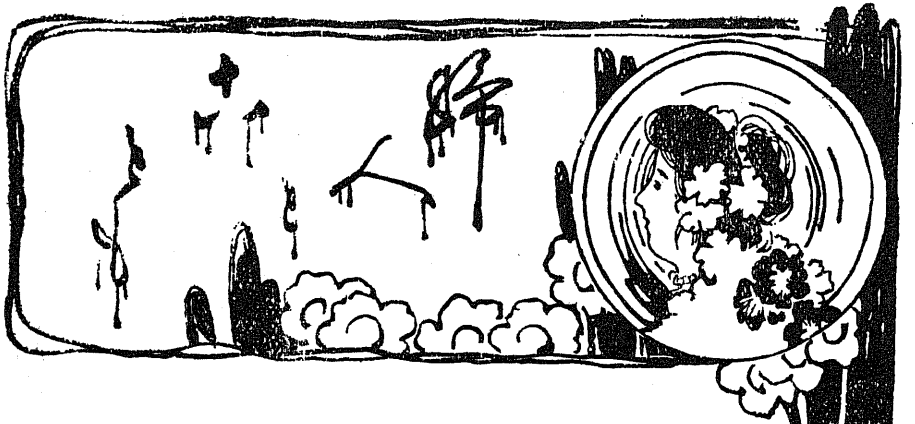
前付二

- 第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク
- 第三條 會員ハラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾銭ヲ願出スベシ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ
  - 一 總會 毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、保育參列品幼兒成續物展覽會、會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲナス會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ
  - 一 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、協議、實驗等ヲナス
  - 一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス
  - 一 雜誌發行、毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス
  - 一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 

會長	一人	會務ヲ總理ス
幹事	十人	會長ヲ輔佐シテ會務ヲ掌理ス
評議員	若干人	會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
		重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
- 第八條 會長ハ客員中ヨリ推薦ズルモノトス
- 第九條 主幹ハ會長ノ特選トス
- 第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ケ年トス  
但シ毎年半數ヲ改選スルモノトス
- 第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルコトアルベシ
- 第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレバ變更スルコトヲ得ス



員會及師講會習講期夏會ルメンバー



## 第八卷第八號

香々

### 感化誘導

人を感化し誘導して不知不識の間に得るところあらくめ様とすることは人生の事業中最も困難なる仕事の一つであるが是と同時に最も高尚で最も美はしい仕事の一つも確かに此の事業である。人を教へて行かじめ教へて進め様とすることは不知不識の中に感化し誘導することよりは遙かに容易すいものである。

何故感化し誘導することが高尚であるかと云ふに其は人の感化され誘導されるものは如何なるものであるかを見れば容易に知ることが出来る。そこで子供の感化され誘導されるものは何であるかと云へば善であり美であり、眞理である。幼児として人間である。其内心的活動と云ふものは靈妙なるものがある。美なる所、善なる處に自然に感化せられ眞理なる所統一ある處には自然誘導されるものである。従つて職に幼児教育に與れるものは健全なる常識(眞)あり其行動は道德的(善)で其趣味(美)は稱す可き者がなければならぬ。而して是以上の三資格を備ふことは可なりな修養ある人、可なりな人格を要する譯であるから此事業に従事する人は一般に世の淑女と稱せられるものでなければならぬ。つまり人を感化し誘導することは社会上最も高尚なる職業であり、教育界中にありても比較的高尚な職業であると云はねばならぬ。

# 兒童の個性及其取扱法

文學士 松本孝次郎

前號で御話致しました通り受動的の子どもと云ふものはそう云ふ譯でありますから筋肉でする方の事よりも頭腦で考へる事の方が得意です、丁度中學校の生徒などにして能く書を描くことが巧みだとかいふ様な小供は却つて頭腦を使ふ方の事は能く出来ないといふやうな事がありますがそれらは畢竟此個性の違ひが表はれた場合であります、或は運動家として競争に勝るといふやうな運動家が却つて頭腦の方の働きは能く出来ないといふのが皆個性の表はれ方です、此類の小供はどうも運動といふことが餘り出来ないやうな風があります實際上に小供を扱つて御覽になれば運動場の方へ餘計出た時に機嫌の好くなる小供は部屋の内に入れば却つて愉快に活潑にならぬ小供である、それらは矢張り受動と發動との違ひから起つて來るものであります、此受動的の小供はどうも運動をすることが不得意ですから新しい遊戯を教へる、新し

い運動を始める時になりますると誠に之を學ぶのに遅いのです、どうもさう云ふ事が不得意で學ぶ事が出来ないのです、此類の小供はどうかと言ふと成程前に申しました注意の流動といふことはありませぬけれ共其代りには注意の不動といふことが又あつていけないのです、注意の不動と言ひますのは同じことを何時までも注意して居つていかぬです、モウ新しいこと、變つて宜いのですけれ共それが又新しい事に變つて行くことはナカク出來ない、詰り一つことを愚圖くやつて居る、斯う云ふ事を言てますがそれは何故一つ事を愚圖くやつて居るか、即ち此性質の小供は注意の不動といふことが起つて新しいことに變はつていかない、まだ何かやる事があるだらう、まだ何か調べることがあるだらう、是では不十分であると云ふ様になつて詰り研充心が餘り清過ぎて今度は新しいことの方に向はないといふ決心になる詰り世間の人が往々言ひますがあの人は事にタンネンで一つことを長い事やつて居ると言ふのは矢張り受動的の個性が著しく表はれた場合を言ふのです

それは即ち注意して見れば幼い中から或小供は一つ事に長く掛つて何時までもやつて居る、それらは注意不動の方です、だからして詰り久しく面倒な事柄に付て非常に精しくなります、非常に精しくなりますれば其亦教育を受ける時代に於ては色く取込まぬならぬから餘り不動であり過ぎて困る、少し此注意を奴い加減の時に他へ移すやうな方向に導いて行かないと多少困るのであります、斯う云ふ様な小供の取扱方は次に御話致します

以上御話しました受動的即ち感動を餘計表さない方の小供といふ者は之を取扱ふのに餘程困難です何故困難であるかと言ひますと自分自身を表てに發表しないといふ事がありまます爲に小供を取扱います人が小供の眞の心を解釋するのに困難を感ずる様になるのです、之だからして今小供が悲んで居りましてもどう云ふ譯で悲んで居るのかといふを側へ行つて尋ねても唯と黙つて居つて答へないといふ風になつて居るので其原因が分らぬからしてこちらで以てどう云ふ様にしたら宜いか殆ど

當惑して仕舞ふ様な有様に陥つて仕舞ふのですさうして其上にこちらで以て餘り推察をして其小供を取扱つてやるといふ事も宜しく無い、多分斯う云ふ譯であらうといふ風に推察してやるといふ事は却つて危険な事があるのです何故危険であるかといふと若し一度こちらで以て執りました所の扱方が誤つて居つても其小供が受動的の性質であります爲にそれで自分の意に適はないといふ事を言はないのです、假令自分の意に適はぬでも黙つて居つて心の中で忍んで居るやうな有様になるのです、さうして益々心の中の苦みといふものが多くなつて来るのです段々に心の中の苦痛が増して来るばかりであるのです、さうして其様に心の中に苦みが増して来ますといふと必ず自分では外部に之を表さないことを努める様になる、假令自分にどんな苦みがあらうとも發表することが嫌ひでありますから益々自分の心の中に藏めて置いてさうして之を表はさぬ様に努めますから其性質といふものが益々秘密的の性質になつて仕舞ふのです世間に能くありません様に自分の朋友にでも自分の



兄弟にでも眞の自分の心を表はさないと子供が  
 る、親にも何も言はないといふ様な小供がありま  
 すが、それは詰り其性質が段々秘密的になつた場  
 合でありませす、斯う云ふ様な譯でありませすから餘  
 り呼動的の小供の心の中を推測して扱ふといふこ  
 とは確かに危険な事が伴ひませすから寧ろこちらが  
 充分にどう云ふ譯であるかを明かにする迄する事  
 は却つて當らず觸らず自然に放擲して置く方が餘  
 程宜しい、其方が安全であるのです、それであり  
 ませすから受動的の小供などが居りませしても保姆の  
 方では強いて其小供をば導いて其小供の性質を和  
 げる事をば急激にやりませすと却つてやり損ふ事  
 がありませす、次第々々に感化し誘導する機會を持  
 つて居るのが必要であつて其成功を急激に望むこ  
 とは悪い、小供に遊戯をさせませす際に此受動的の  
 小供は却つて遊戯の嚮導者、遊戯の中心となる位  
 地に屢々立たせる方が宜しいのです、前に申した  
 發動的の小供と反對で嚮導者の位地に立たせる方が  
 此小供の性質を直して適當して居る、其代りには  
 此種類の小供は餘り運動といふやうなことは巧み

に出来ませぬからして愈々活潑に多くの小供に愉  
 快を與へるやうな方法でやるには餘程六つかしく  
 わりませすけれ共、併し此小供の性質を直すといふ  
 方から申しますると屢々遊戯の嚮導者の位地に立  
 たせる必要がありませすからそれが爲め、是非さう  
 云ふ方法を執らなければならぬのです、それか  
 らして此類の性質の小供には成るべく發問を多く  
 與へる方が宜い、詰りこちらからして導いて自分  
 を發表する機會を成る可く多く作つてやる事が要  
 要なんです土臺が發表を好まぬ方の小供でありま  
 すからしてそれ丈けに導いてもナカク發表しま  
 せぬけれ共併し屢々發問をし是非其小供に答へさ  
 す様な方法を執りますると其中に段々發表する様  
 な習慣が出来て來るのです、若し此類の小供が發  
 表をいたしました時に大抵は其發表を獎勵するや  
 うな言葉を用ゐることも必要です、其言葉の使方  
 が發動的の方の小供に向つて餘り獎勵的の言葉の  
 みをを用ゐて居りませすと却つて益々發動的になり  
 ませす受動的の小供には主として獎勵的の言葉  
 を用ゐた方が効力が多いのです、斯う云ふ點に注

意して受動的の小供を扱つて行きますならば暫くの間には追々と其性質を改めることが出来る様になるのです、

詰り受動的の小供が段々に性質を改めることが出来ないでさうして悪い方に極端に走つた結果ではその事がどんな工合になるであらうかといふ事が丁度青年の時代になりまして此文弱に流れるのは受動的の青年が極端に走つトウ、直すことの出来なかつた結果であります、例へば無暗と眞の文學の趣味といふものが分らないのに唯と議論をやつて見る、眞の美術といふことは分らぬのに美術の事を言つて見とか勞働を賤むとかいふやうなさう云ふ文弱の青年といふものは詰り此受動的の小供が追々と其個性を改めることが出来ないでさうしてさう云ふ悪い方面に向つて仕舞つた結果であります、それだから其青年の間に於きましても矢張り幾らか尙武派とも言ふべき少しも外部の向には構はぬ粗暴な事をやつて居つて自分の思ふ儘の振舞をするといふやうな幾らか武に走り過ぎた青年は詰り發動的兒童が其極端の所まで弊害を

持つて行つた結果であり、さう云ふ發動的の性質は何處までも其脳髓が非常に粗略になつて仕舞ひまして或緻密な仕事といふものは少しも出来ないうやうな風になつて仕舞ふのです斯う云ふ譯でありますからして小供をば取扱ひます點から申しまするとどうしても此個性といふものを觀察して受動的の者はモウ少し發動的にする様に致しまするの者はモウ少し受動的の方にする様に致しますれば餘程調和的に即ち圓滿なる性質の小供が出来やうといふ譯でありまして能く此二つの性質をば調和することに心掛けて行かなければならぬので

次には此想像に關する個性の事に付て御話いたします、小供が色々想像を致しまする際に於きしても矢張り小供に依つて個性が違ふといふ事を發見することか出来るので、それに依つて又保育するのに取扱方を違へて行かなければならぬ必要があるのですそれで此個性といふものは之を考へて行きますのに想像に使ひます材料の方から研究される所の個性とそれからモウ一つは想像力の

働方、即ち作用の方から研究される個性と斯う云ふ様に分れるのです、それで材料に關する個性と言ひますとどう云ふ事を指すかと言ひますのに小供が想像を廻らします時に當りまして或小供は特に眼からして得て來た材料を重みに使ふのです又或小供が耳で聽いた所の材料を重みに使ふのです、先づ此二つの種類が一番に多いのです、例へば小供が一度自分の眼で以て見ました事柄は能く覺へて居つてさうして小供の致します作業の上

に自分の眼で見た事が始終形になつて表はれる様な風に働く所の小供もあり、例へば表で以て今自分が或形の物を見て來たらばその形の物を自分で造つて見るといふ事を喜ぶ小供があります、さう云ふのは眼で見つて來た方の材料に依つて想像を廻らす方の小供であり、それから或小供は耳で聽いた方の即ち音楽のやうなものを能く覺へて居つてさうして重みに其音楽の眞似をするといふやうな事で以て何時でも想像を働かして居るやうな小供があるのです、斯う云ふやうな性質は長く續きまして學校教育を受ける様になりまして

矢張り眼で見た方の事を能く覺へて居る様な小供は同じ作文にいたしましても記事文的の文章を上手にやる様になり、自分が眼で見つて來たことを其通り覺へて居つてそれを表はす様な風であり、ますからどうしても記事文が巧みに出来る様になるのです、其他畫を描くといふやうな場合にも概して眼で見つて來たことを覺へて居る方の小供は材料が豊富です、耳で聽いて來たことを覺へて居る様な小供よりも却つて眼で見たことを覺へて居る方の小供は色々な事を書顯はすに都合が宜しい、併ながら簡単な畫を一つ描いて置いてさうして其畫の中に色々な意味を含んで居る、畫で以て小説的のことを表はす様に話と聯結を附けてさうして話しながら描いて居るといふやうなことは耳で聽いたことを覺へて居る方の小供に大變有り勝であり、ます皆さんが極簡単な畫を描いて居つても其小供の想像が誠に巧みであるといふ様な風に感動される場合はどうしても聞いて來た事を覺へて居る方の小供が大層多いのです、詰り話をしながら畫を描いて行くやうな事で是は極幼稚園時代の小供には

著しく見へないけれ共其性質たるや矢張り聞いて来たことを覺へる小供に著しく表はれて居るです

そこで此二つの性質は將來或専門の業務をいたします時になりまるといふと餘程小供の發達の仕方が違つて來る様になります、例へば眼で見たことを能く覺へて居る方の小供は動植物のやうな自然物を研究する學問又は機械を組立てるやうな學問、重みに眼に訴へてやります業務をいたしますと非常に發達する様になる、それからして耳の方で聞いて能く覺へるといふ小供は音樂を稽古するとか或は演説家になるとかいふ風の事は餘程得意に上手に發達する事が出来る様になるのです此想像の材料がどう云ふ様な方面に餘計富んで居るかといふ事を考へる事が將來其小供をばどう云ふ方向にしたならば宜からうといふ事を極める時に參考の材料になるのです

斯う云ふ様な小供の取扱方から申しますると先づ多くの小供は大抵眼で見たことを覺へて居る者が多いのですからしてさう云ふ様な小供に對して

はこちらで話をして聽かせた事をば能く覺へさせ其方の習慣を養ふ方法を執るが宜い、詰り耳で聞いて来たことを能く覺へる方の性質の小供はこちらで以て話してやります御話の如き事は容易く能く覺へて居りますから餘りこちらで復習的の話をさせて見る必要は極少い、却つて眼で見たことを能く覺へるでわらうと思はれる小供の方に復習的に述べさせて見る事が大變必要です、言はゞ上手に言へるといふ者よりも上手に話の出來ない者、復習の出來ない者の方に發問をして成るべく其事の答を求めさうして自然に話を能く覺えられない方の子供に平素から注意を餘計に持つて居る様にさせるのが方法としては必要なる注意になるのです。耳で聞いたことを能く覺える方の子供には詰り割合に多く發問してやつて構はないと云ふことです。

其代りには耳で聞いたことを能く覺えて眼で見たことを能く覺えない方の子供には或形の圖など示して、其圖を能く覺えさせてそして其圖の通りをば全くの記憶に因て考へさせることが必要です

# 幼児教育の方法に關する 重なる理法とは如何なる ものなるか

和田實

左の一篇は今回の夏期講習會に於て記者の講演したる幼児教育學中の一節なり。會員某氏の希望もだしがたく急劇摘録して之を筆版に寫して講習員諸君に頒たんとせしが折能くも本誌に餘白ありしを以て之に掲げて一般會員並に讀者諸君の御批評を仰ぐことゝはな

しつ。  
幼児の教育法として矢張一般の教育中に含まるべき筈であるからには其根本に横はれる原理原則と云ふものは兩者の間に何等の差異の有らう筈がない。若し幼児教育の根本原則が果して一般の教育の原則と相容れないものであるとか、或は一般教育の原則は以て幼児教育を律することの出来ないものであるとするならば二つの教育事業は正に各

八

殊別なる原理法則の本に各別個の教育學を構成せねばならぬ。一個の教育事業が二つの異なる學理を有するとは如何にしても許されがたき次第ではあるまいか。蓋し幼児教育とて其原理原則としては矢張り一般の教育と何等の差違ある可き筈でもないのである。然らば一般教育の根本原則とは如何なるものであるかと云ふに一言にして云はば、「自然主義」即ちこれである。換言すれば被教育者の發達性能に應じて之に適合せる教育を施さんとするのが現在に於ける教育事業の理想である。此自然主義なる教育法は其由來する處實に獨のメニユースに始まれるものである。今氏の言に因つて之を徴するに

「技術は自然を模倣するに過ぎない。小年教育者は醫師と同じく唯自然に従ふ可きもので己れ其才たるにわらず」と云つて居る。又佛のルツソーは次の様に云つて居る。  
「兒童の性質を研究し之に適合せる教授を施す可し」次にフレイベルの師たりしペスタロッチ氏も之と同様なる意味の言説をなして居る。

「教育の目的を達するには自然殊に人間精神の自然性が指示する方進を採る可し」と云つて居る。最後に幼児教育の開祖たるフレーベルは如何なる原則の上に幼児教育の理想を組み立てたかと云ふに曰く

「子供の心には發達す可き人道の萌芽を有して居るので之を導き、之を保護して行つて一方には其不健全なる影響を與ふる誘惑より之を防いで以て本質を發達せしむ可きである。」

又曰く

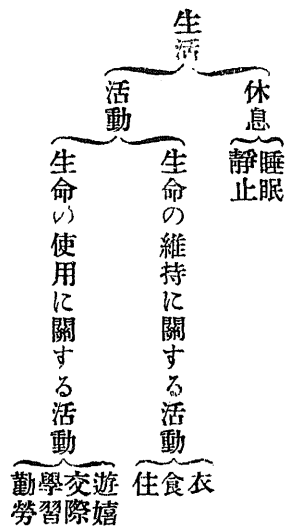
「諸君は敢えて我兒の本性に違へる目的を幼年時代に強いて斯くて普通の調和の發達を望むのは亦甚だ無理な次第ではないか」と云ふて居る。言葉こそ一様ではないが教育史上に其名聲赫々たる以上の諸大家は斯くの如く皆一齊に教育の自然主義なる可きを主張して居る。今是等諸家の所説を前提として之を一個の理法に歸納して見るに明に左の如き結論を生ずる。即ち

「教育は被教育者の生活状態を支配することに因りて其目的を達す可きものである。」

是は當に吾人教育者の活動の據つて起る根本原則である。吾人は此原理を前提として凡ての教育的活動を演繹せなければならぬ。凡ての方法と云ふものは此規則から割出して行かなければならぬ筈である。

倍て斯の如くして吾人の仕事の根本法則は定まつたとしたらば次には如何にして被教育者の生活を支配す可きかと云ふことを討究するのは當然の順序であらう。而して如何に被教育者の生活状態を支配す可きかと云ふことは先づ被教育者の生活を調査し其性質を明かにする上に其方法は自然に見出さる可きものである。斯くして始めてフレーベル以上諸大家の改革思想にも適する譯であつて證する處自然主義の自然主義たる所以である。然らば幼児の生活状態は如何に、余は次に之を説明して見様、元來人間の生活と云ふものは之を大別するときは靜的には休息となり動的には活動と云ふものとするのである。而して此活動は更に大別して生命の維持に關する活動と生命の使用に關する活動の二つとすることが出来る。生命の使用に關

する活動は又更に細分して遊嬉的活動、交際的活動、學習的活動、勤勞的活動の四とす可きである。以上は人間の生活の全体を分類しての話であつて之を圖示すれば左表の如くなる。



大人である所の人間の生活の全部は實に右表の如くであるが幼兒の生活状態は全然此表の示す所に一致しては居らぬ。是は幼兒の幼兒たる所以であつて誠に止むを得ざる所である。然らば幼兒の生活状態は此表に對して如何なる相違があるかを仔細に見て行つた結果、幼兒の生活状態は實に左表の通りであつて是れ以外大人の有するが如き複雑なるものを有して居らぬ様に感ぜられる。

### 幼兒の生活

- 一、休息
- 二、衣食に關する習慣的行動
- 三、遊嬉
- 四、交際に於ける習慣的行動

人或は幼兒にも純粹に學習、及勤勞の二作用あることを稱するものがあるけれど是は大なる兒童を観察した結果か然らざれば是等の基礎たる萌芽的行動が遊嬉中に於て可なり大なる發達を爲したる有様を看守して斷定せる認見であつて決して正當なるものではないのである。一體子供、遊嬉と云ふものは人生に於けるあらゆる活動の縮寫圖であると云ふことは遊嬉の研究家又は兒童學者等の一 generally 唱ふる所である。吾人の疑を容れぬ所である。既に人生の縮寫圖である以上は其中には交際的活動もあらずし學習的活動も乃至は勤勞的活動もあらうと云ふものでは是が決して直ちに純粹なる意味に於て又嚴格なる意味に於て、學習とか勤勞とか稱せらるるものではないのである。然るに一部分に於ける幼兒教育者は動もすれば此遊嬉的なる交際的學習的勤勞的活動を見て以て直に之を純粹なる意

味のものと見て居る。従つて其教育の方法には種々な誤點、見の散見せられるのは誠に慨はしい次第である。餘談は借て置いて更に吾人は前表の四項に就いて考察するに其一、二、及四の三項は一括して習慣的行動と稱することが出来る。故に幼兒の生活状態は約して習慣的行動と遊嬉的行動の二項と見ることが出来る。

是に於てか幼兒教育の事項は當然「習慣」「遊嬉」との二つであると云はなければならぬ。實際幼兒の習慣的行動を整理し其遊戯を完全ならしむることとに於て幼兒教育の目的を遂げんとしたことはフレーベルの教育思想であつたに相違ない。氏の著「人間の教育」中に論じて居る所を見ても此邊の思想を窺ふことが出来る。

併し從來の幼稚園に於て課して居る所の保育事項と云ふものは遊嬉の外に談話、唱歌及手技の三つを置いて居る。是は吾人の便宜の爲めの並置ならば差支はないが若し唱歌や談話や手技の如きものを彼小學校等に於て課する純粹な教科の様に考へる人があるならば吾人は大に排斥せざるを得ない。

吾人は遊嬉ならざる唱歌、遊嬉ならざる童話や手技があらうと云ふことは之を認めない。幼兒の遊嬉の中に作業的のことがあり文學的のことがあり若しくは音樂的のことがあつたにしても夫れが直に大人の意味に於ける如く純粹なものではないのである。幼兒の遊嬉は人間全体の模型であるとフレーベルの云はれた通りで遊嬉は人類の活動の凡ての萌芽を所有しては居るが其は單に萌芽に過ぎない。決して出來上つた形に於てのものではないのである。故に幼兒教育に利用される凡ての事項は悉く遊嬉の冠の中にある可きもので遊嬉の意味を離れると同時に幼兒教育の事項としては相應しからぬものとなるのである。何故と云ふに幼兒の發達は其自發活動の築成する所であるとはフレーベルの云つて居る主義である然るに其自發活動なるものは吾人の所謂遊嬉と稱する所のものであるからである。

人或は遊嬉の教育的價値を疑つて一個の遊嬉が斯く大なる教育的價値を持つてあらうか不安心に思ふ人がないが是は實に杞憂に過ぎない。



實際子供は遊嬉すればする程益能く發達するものである。伊太利のコロツツアと云ふ人は遊嬉に就いて頗る研究した人であるが此人は遊嬉の教育的價値に就いて左の如く云ふて居る

遊嬉に於て必要とせらるゝ或行動の反復は此行動を固定し且容く殆んど習慣的に之を爲す様にする爲めに有要である。而して此固定、輕易習慣は畢竟力に關して收得することを得得であり増殖である。

昔にコロツツアのみならず幼児教育に遊嬉の價値あることは既に三千年の昔希臘のプラト！に因つて鼓吹されたものである。氏は遊嬉に關して次の様に云つて居る。

三才より六才迄の時期に於ては兒童の意味に於ける遊嬉を許さなければならぬ。換言すれば此時分の遊嬉と云ふものは其年頃の子供の自然に傾く所で彼等同年輩位のもものが一所に集合したときには自ら見出される様なものでなければならぬ。吾人は遊嬉で以て兒童の傾向を其業務に有益な

方向に導くことが出来る。

一定の遊嬉を變更することなく繼續させたならば夫れは以て品性陶冶の手段とすることが出来る。

近くは我幼児教育の開祖たるフレーベルも其著人間の教育に於て幼児が遊嬉に因つて發達することを細論して居る。故にスペンサーが云つた通り教育に於ける成功は只人心が成熟に向つて進み行く自由の發達を助けて行くにあるとしたならば幼児の教育は幼児の遊嬉と習慣とを指導することに因つて其目的は達せらるゝに相違ないのである。是に至つて難者或は云ふ人がある。幼児教育が斯の如く遊嬉と習慣との指導に因つて爲し得るものならば幼児教育者は詰る所一個の子守女に過ぎないではないかと一應尤もな不審ではあるが併し是は一を知つて二を知らぬものである。成る程子守女は幼児の行動を看護する。又其遊嬉は或程度迄は指導する。併大体に於て子守のする處は主として消極的の注意に過ぎない、子供を危険に接せしめず害惡に接せしめないと云ふのが主たる目的で決し



て積極的に幼児の遊嬉を案配し之を或方向に導かうなど云ふ様なことは到底出来ないものである。然るに幼児教育者は幼児をして如何に完全に遊はしむ可きか其習慣は如何様に養ふ可きかと云ふことに就いて常に積極的考案を立て常に其腦裏には被教育者の將來に就いて明瞭なる意識を有するものである。斯る積極的の用意が所謂子守女なるものに出来様か、是れ即ち幼児教育者が専門の教育家として充分の地步を占め得る所以である。

若し夫れ幼児の教育が或人の云はるゝが如く單に之を保護するに過ぎないものならば即ち止む。苟も教育の目的に向つて之を誘導する必要があるならば積極的に之が豫案を要し組織せられたる豫定の見解を持つること必要なるは明かなる事ではあるまいか。而して斯の如く組織したる豫案を立てることは子守などの到底企及し得る所ではないのである。

以上述ぶる所に因つて幼児教育が遊嬉と習慣とを指導する上に存することは略明かになつたらうと思ふ。然らば幼児の遊嬉は如何に之を導く可きか

習慣は如何に之を養ふ可きかと云ふことは次に來る可き問題である。之に關して吾人は先づ如何なる理想を持つ可きかと云ふに元來幼児に養ふ可き習慣は不知識の間の移行を意味して居るのであるから其間に壓制とか抑壓とか苦痛とか云ふ様なものを含まないのが當然である。而して幼児の遊嬉は其性質上當然愉快なものの悦ばしきものであるから併せて幼児教育の理想とするところは彼等が其天真を發露して嬉々として遊樂し忻々として嬉戯せる間に暖春の日光が万木を伸暢せしむるが如くに平和と快活との間に漸次目ざす所に誘導して教育の目的を遂げんとするものである。換言すれば幼児教育者は穩かに子供を養ひ充分に遊ぶ所をらしめて其間に導く所をあらんとするものであるから、之を幼児の側から見るときは善良な習慣に因りて行動し最も善く遊戯する處の子供たらしめんとするものである。



# 習慣の理法と幼児教育

光藤泰次郎

幼児を教育する任務を持つて居る母親や、幼稚園の保母は、習慣の理法に就ては、深く考究し、多く其の實例を知らなければならぬと思ふ。然るに廣い世間には此の習慣の理法を蔑如するものがあるやうである。我が幼児教育の社會にもかういふ人が、まるでないとはいへぬ。そして我が子人の子を賊ひ、自身も亦蒔いた種の悪い實を刈らねばならぬ羽目に陥るものが往々あるやうである。昔支那戰國の時代に、國に、といふ王がありました。政治を怠りて、あまりに身を入れぬところから、近臣が之を諷して、ある處に鳥がありませす。三年の間飛びませず、鳴きませず、これ何の鳥であらうといひますと、此の王は餘程賢明なる性質の王だと思つて、忽ち自分を諷したのだと悟り、三年飛ばなければ、飛ばば將に天にびいらう。三年鳴かなければ、鳴けば將に人を驚かすだらうといつて、それより繚然と、今までの心入を

改め、政治に身を入れたから、國內が非常によく治まつたといふ話がある。これは怠惰者のよく口にかゝる所の有名な話であるが、まづ此の話のやうに、今までの怠惰者が急に勤勉家になるなど、いふとは、絶無の例ではないか、しかし普通の例ではない。習慣の理法の側からいへば、稀にあるべき事柄であつて、寧ろ之に背反した事實といふ方が適當である、然るに世間には之に類した例が少くない。彼の幼児を教育するに、謂はゆる放任主義をとるもの、如きは、其の一例であらう。成程幼児を保育するに、之を大人を扱ふと同様の扱をするのは、無論相違である。大人の身體や精神と、幼児の身體や精神と異なつて居るから、其の扱は無論相違すべきであるが、しかし其の取扱を別にすると何れも放任主義を取れといふのではなない。幼児の身體なり精神なりに適合するやふに、取り扱へといふとである。然るに世間の事は一の極端から他の極端に走る傾向があるものだから、沼々たる社會、随分多く放任主義の幼児教育を採用するものがあるに至つた。しかし此の主義のわ

やまれる點は間もなく發見せられ、此の主義の弊害の多いことは間もなく分つて、今では穩健なる幼児教育主義の勢力を占むるやうに至つたが、まだ往々此の謬見を抱いて居るものもあるやうだし、其の弊害を受けて居る幼児を見受くるのが少くない。放任主義のわるい點はどこにあるかといふに、つまり此の習慣の理法を無視する處にあると私は思ひます。子供に禮儀作法を八ヶましく責むる必要がないといつて、一切放任しおき、相當の年頃になつて、いざ必要といふとき、急に仕込まうと思つても、さう考へた通り旨く仕込めるものでない。成る程子供のときに、大人と同程度の禮儀作法を責めたならば、子供に取つて無論無理であらうけれども、しかし子供相當に年齢相應のものを教へ込み、ならして行とくいふとは、少しも困難なことでなく、又無理なことでない。いざ必要といふ年齢になつて決してまどつく氣づかひはない。又子供を教育するに、少しも生活の苦渡世の苦を知らさずに育てやうといふ主義があるやうであります。無論其の動機は我が子が可愛い爲で

あつて、決して我子の爲あしかれといふ考でないとは明く白々であります。しかし其の結果は我が子善かれと思ふ親の希望通りに參らぬのみか、或は反對の結果を來すが往々あるやうであります。なほ少し具體的に申しますれば、子供を育てる際に、衣服などは、成るべく質素を主とした方がよいと思ひますのに、或は身分不相應に、金目のかゝるものを着せる悪風があるやうに見受けられます。それも男の子はさほどにも感じませんが女の兒になると、非常に贅澤のやうに思はれます。又身分相應といつても子供はいづれも修業中のものであるから、自らその程度があらうと思はれます。然るに世間一般の人は、内所の苦しいのをかくして、美服を着飾らせたり、或は子供の求むるがまゝに買ひ與へるものがあるやうであります。こゝは子供の教育に心を用ふる者の考へべき點であらうと思ひます。以上は衣服の一例に過ぎませんが、一事は萬事で、我が國の人が子供を遇するに、其の方法を誤つて居るとが少くありません。幼少の時から子供の活動好きな性質を利用して、子供が

勞作を好み、骨折を厭はないやうに仕向けて、良  
 習慣をつけべきのに、家庭の好き處になると、安  
 逸無事にして居るが人の理想であつて、勞作し勤  
 勉するのは恥辱であるかの如く思つて居る人もあ  
 る。随分間違つてゐる考ではあるが、かういふ考  
 から全く子供の健康をすゝめ、智力を鍊るべき勞  
 作骨折をばさせないで、常に好機を逸しつゝある  
 のは實に堪へ難い次第であります。中流以下の家  
 庭でも、成るべく子供に、苦勞を知らせないで、  
 上品に、すうりと育てあげやうと心掛けて居らる  
 向が少くないやうであるが、成る程の觀念に  
 乏しく、利害得喪の外に超然たれば、上品は即ち  
 上品であらうけれども、此の如きは競争の激しい  
 現今の社會に必要な資格であるとはいへぬ。我  
 らは寧ろ利害得喪は十分に打算しつくし、よしや  
 自分に得る所大なるものがあらうとも、しかし無  
 形に失ふ所があれば、寸毫も取らぬといふ風に子  
 供を仕立てあげたいと思ふのである。物質上の利  
 害得失は無論よく分りさつて居るが、しかし理に  
 於て正しからざれば、利も取らず、理に於て正し

ければ害も避けられないといふ立派な人物に仕立て上  
 たいものである、さうするにはどうしても子供を  
 育てるに謂はゆるお坊ちやん育ちに育てゝはなら  
 ない。少い時から、少い相應に勞作に慣れしめね  
 ばならぬ、苦勞に慣れしめねばならぬ。ふだんか  
 ら勞作に慣れて居り、苦勞に慣れて居れば、時來  
 りて社會へ乗り出すに當つて、心配もなく、氣遣  
 ひもない。之に反して、あまりに大事にしすぎて、  
 ふだん勞作に慣れしめず苦勞になれしめずにかく  
 と、いざ社會に乗り出させやうとする時に、一向  
 社會の様子がわからず、傍の者がどうも心配でた  
 まらんといふ様になるものである。かゝる場合に  
 如何に心配したからとて、如何に氣をもんだから  
 とて、今までの習慣は急に直るものでない。また  
 急に社會に出かける準備が出来るものでもない。  
 子供を愛して苦勞せしめなかつたのが、却つて子  
 供を苦勞せしむる種となつたのである。勞作に慣  
 れしめぬのは、子供を愛する爲であつたが、其の  
 結果は子供を愛するのではなくして、却て子供を  
 苦しませるやうなものであつた。此の上に就ては

大に熟考して幼児の教育に従事せねばならぬと思ふ。又子供が小學校に行き出す頃になると、まだ小學校時代ゆえ、何も復習するの必要はあるまいと一切放任して顧みぬ人がある。成る程小學校時代の事故學科も格別六ヶしい事はないそれ故家庭で復習させなくとも、どうやらからやらず小學校を終る位は、頭腦の普通なる子なら先づ差支はない。しかし餘程天才のある子の外は、どうやらからやらず終るといふだけで、決してよく出来るといふのではない。中學にはいる。思ふやうに成績がよくない。復習をせめる。けれども本人は一向平氣で、少しも欲も徳もない。實に吞氣至極である。かういふ人が世間には随分多くある。中には全く頭腦のわるい爲に成績のよくないものもあるが、大抵は小學校時代に復習の習慣がつかないが爲のやうである。復習の習慣として外の習慣と同様で、さう急につくべき筈のものでない。小學校時代は一切放任して、遊ばせておいて、中學になつたから急にやらせやうとしても、さう人間界のとはうまくゆくものではない。小學校に入りたての時から、學校に於

てどんなを習つたか、どんな御話をきいたか、どういふ字を習つたか、どんなお勘定をしたか、毎日尋ねて見て、之を復習してやる。學校では三時間かゝつたとも、三十分間位あれば、何もかも皆出来てしまふと思ひます。かういふ時分から復習の習慣をつける、學んだを十分に熟練する習慣をつけると後來の學習に大に助となるばかりではない、實に其の人物を研ぎあげる上にも大なる助となるものであると思ひます。凡そ人の務は種々ありましようけれども、其の日其の日の務を完全に果たすといふとは、甚だ良い習慣であるといはねばならぬ、子供が小學校にあがつた位の時から、其の日其の日の務を完全に務めさすといふことにしたならば、實に學問のため、其の人物修養のため、一舉兩得といつて善からうと思ひます。或は子供に復習などさせるのは、幼少の時からあまりに頭腦を用ひ過ぎる嫌がある、せめて中學にはいつてからとか或は小學校でもとの高等一年、今の尋常五年の頃から遅くはあるまいといふ説があるかも知れませぬ。一應は尤のやうに聞えますが、私

は此の説には反對します。苟も學校に出して學ばした以上、其の學んだを飽くまでもよく熟練するといふとは非常に良い習慣であると同時に、學んだ所をよいか減にして放つてかくといふとは非常にわるい習慣であると思ひます。子供の時分から此の良い習慣にならして、悪しき習慣に遠ざからせねばならぬと思ひます。尋常一年頃から復習をさせたりなどとすると、大へん頭を使ひすぎはしないかといふ説もありまじやうが、私はやり方によつては決して使ひすぎないと思ひます。成る程復習など、申しますと、兎角時間がかゝるやうに思ひますけれども尋常一年頃の極簡單なものであれば、最多限が前に申した三十分で澤山であります。大抵は一科について五分もあれば澤山だと思ひます。さうすれば決して頭腦を過勞せしむる恐ろしいと思ひます。尋常一年の頃から復習の習慣がつき、學科に興味がついたならば、後にはすべて一人で復習をし、一人で何でも學科の始末をするのが出来るやうになつて、決して人手を煩はすに至らないと思ひます。然るに前申したやうに、

あまりに子供の頭腦を使ひ過ぎはしまいかなど、斟酌が過ぎて、つい復習の習慣をつけをこない、後々になりまして、如何にはたからは骨を折つて見ても効果は見えませんが、心配して見ても本人は一向平氣であるといふ現象を呈するであらうと思ひます。習慣といふものは、至極大切なものである。此の大切な習慣は一朝一夕に養成されるものでもなければ、又一朝一夕に改良されるものでもない。漸を以て進み、漸を以て改めて行かねばなりません。それ故に幼児教育の任務を持つた所の母親とか幼稚園の保母とか、幼児の將來を左右するの關鍵を握つて居るところの人々は、此の習慣の理法に就ては、深く研究を致されて、銘々の子供や幼稚園の兒童をば、善さが上にも善さに導くやうに力を致されんことを希望いたします(完)



# 成功の幼時

樂 天 子

世に大なる功をたてたもので、小學校だけの教育を受け永く小學の頃を忘れぬものは少なくない、高等教育の發達せぬ以前の事は措て言はぬとし、現代に於て一例をあぐれば、英國のテムバレン氏は其の主なるものである。氏は獨逸のウイヘルム二世、米國のルースヴェルト氏と並んで世界の大立物と見られたことがある、今は稍々勢力がないが尙斯く思はれぬでもない。日英同盟は種々の事情から成り立つて居るが、英國側より見れば南阿に四十五萬の兵を出し、二十億の金を費したため、露國に對し東亞に勢力を維持するに困難を感じたといふ處もあらふ。此の大戦役を執行するに舉つて最も力あつたのは、即ちテムバレン氏であつた、殖民大臣でありながら總理大臣以上の勢力を振ひ、其の長男も内閣に列した程であつて、一時英國の政治はテムバレンの政治といつて宜しいのであつた、只に政治の上で重きを占め

て居るばかりでなく、グラスゴー大學の總長に推されバルミンガム大學の總長に推された、固より名譽職であるけれども、兎に角その職に居つたのであつた、又ケンブリッジ大學、オクスフォード大學、及びダブリンより大博士の學位を受けて居つた。

ところが氏は如何なる教育を受けたかといへば、僅かに小學を卒へて少しく中學校に學んだに過ぎぬ。氏の評判はさまざまで、大に賞むるものもあれば、大に罵倒するものもあるが、孰れにしても、目前の事を處断するに最も巧みで、自分のなさんとする所は、如何なる手段をも顧みず、どういふ無理をも厭はず、以前の敵を味方とし、以前の味方を敵としてかまわぬ、皆其の時の都合次第であるといふに一致して居る。しかし唯よき機會を得たるばかりでかかる地位に至つたといふ譯には行かぬ。どこかに普通に優つた處があるのである。氏は子供の時にジャーロットベース嬢に就て、書を讀む事を學び、十歳にしてアーサージョンソンの小學校に入つて十四歳で倫敦大學附屬に入り、



十六歳の時に之を去つて以來全く教育を受けないのである、しかし自分の地位が次第に上つて來ても、何時も前に居つた學校を忘れず、ペリス嬢が老衰しても度々見舞ふ事を忘れなんだ、又長男を伴つて、ジョンソンの小學校を見舞ひ、以前行處に腰掛があつて、何處にオルガンがあつたといふ様な事まで説き示した。小學校の外教育を受けた事なく、先生といふもそれだけであるから、能く覺えて居るのであらうが、子供の時に教育を受けた所を永く忘れぬのは、只の成り上りのものなし得る所でない。自分勝手に事をして遠慮會釋もないと考へられて居るが、子供の時に世話を受けたものを忘れぬ所を見ると大事を成し遂げたのも、偶然でない事を推し測ることが出来る、もとより欠點の多い人物であるが、この邊は小事でも感心といはねばならぬ。

すべて世の中に立て大事業を成すものは、普通の成り上りものと異りたる所があるらしい。子供の時の先生を忘れぬと云ふ事は、極めて平凡の事であるが、普通の成り上り者にはないやうである、大

事業をしたものは、人を人とも思はず、不人情の様な所が見えても、その間にどこか人情の自然を得て居る所がある。ナポレオン一世の如きは、何人も蓋世の雄者とする所であるが、時として腕を組んで椅子に掛つたまま考へ込んで居たことがある、左右の者は何か雄圖を案じて居ると思つて居た。所が後で人に語つていふには、自分が黙して考へて居ると、人は色々心配して居る様であつたが、實は子供の時にコルシカに居た時の事を憶ひ出して居たのであるとの事であつた。

世には子供の時の事を忘れて可なりに仕事をする者もないではないが、かゝる者は概して大に伸びる事が出来ぬと看做して差支なからう。



# 家庭に於ける趣味の涵養 (其二)

川口孫治郎

## 第三節 服装の事

猿にも衣装といふ諺があつて、服装の如何によつて人の外觀は一ト目には如何様にも映するものであるから、年頃の女子供などが美しい装束をしたがるのは無理もないことである。實は人間の誰でも、美しいことを好まぬものは決してない、唯其美しいとする標準が違ふまでのことである。親としても其兒女に着飾らしめたいのは尤もな人情である。殊に大都會などでは、少しは無理算段をしても飾りたて、かく方が却て大經濟であるかのやうなこともあるさうだから、飾り得る人は飾つても他人から別に苦情はあるまい。

其他、新前の辯護士だとか、世間並みの醫師だとか、ありふれた相場師だとか、ペイ／＼の銀行員だとか、此外、多数の俗人相手の人氣商賣などをするものなどには、體裁といふことが營業上の資

本でもあらうから、玄關も大きく構へ、召使も多人數雇ひ、流行らなくてもはやつて居るかの如く、暇であつても忙はしげにする必要あるやうに、服装などは殊に立派にする必要があるだらう。

併し一般人士にありては、何事にも身分相應といふことが大切で、服装に於ても亦然うである。矢鱈に贅澤を極めたからこそ美しいと限つたものでもあるまじく、伊達の薄着も厚着と同様に趣深いといふわけでもあるまじく、江戸兒の殊更に裏表を違へたのも街ひ過ぎて趣味の上乗とはいひがたかるべく、中老で小兒のやうなのを着くも、男で女のやうなのを着くも、女で男のやうなのを装ふも、うちしめつた場所に華やかに装ふことも、相應したわけではあるまい。全體、相應といふ標準は極めてボンヤリしたもの、やうであるが、併し大凡その標準は言辭に簡單にいひつくせぬ中にドウヤラ確に在る。そこが即ち各人の健全な趣味の働くべき範圍である。

根本要件としては丈夫と清潔との二つである。從來、趣味などを口にする人の中には往々華奢を街

つていろ／＼装ふて得意がるものもあつたやうであるが、それが必しも健全な趣味が働いて居るとはいへぬ。晴着と常着との別に從つて多少の用心をしなければならぬであらうが大體右の二條件を根本として前述の如く身分年齢季節場所等に相應するやうといふ標準に照し合した上にも、尙ほ其模様なり縞柄なりさては裁縫なりに、趣味の働くべきところが十分ある。殊に『着コナシ』とか、用ひこなしかいふことが、言文に發表し易からぬ間にあつて、それが即ち趣味の作用して居るところであるのである。毎年十二月に入つてから市中を連れ立つて歩いて居る新兵諸君が如何にも新兵らしく妙に人目を引く。四月に入つてからは當分、地方から出て來た男女學生なども歴々眼にたつて映する。勿論、新兵の着衣は必ずしも嚴密に寸尺に合はして調製したものではなく、既製品中の着古したもの、中から寸尺の合ひさうなのを給せられたせいでもあらうが、併し古兵だつてさう嚴密に合はして着て居るわけではない。さるに寧ろ舊い多少褪せたのを着て居る古參兵が落付よく

見えて、新兵が恰も節句に祭らるる粗末な雛のやうな外觀を呈して居る。地方出たての學生殊に女性のそれなどの服装は、花の都に遊學するのだからとて寧ろ贅澤すぎたハイカットのを着けて居るさうだとの事であるが、併し何處かに落付かない否調和しないやうな所ろがある。斯の如きは固より其新兵新學生の心氣の落付かぬせいなるは勿論なれど、第一着コナシがよくない、着物を着たのではなくて、着物に着られて居る。人が歩くのではなくて着物が人を連れて居るやうな嫌があるからである。否、新兵、新來學生ばかりではあるまい。所謂ハイカラーといはるゝに殊に多い。

流行の事。之は別に論ずるつもりであるが、世には極めて狹義に解して、服装の上の變遷を促すハヤリのみと認めしものさへあるやうである。此意味の流行といふものは或意味からいへば輕薄極まるもので、猫の睛のやうに移り變つて繰り返して居るものである。夫故に靜觀して居れば大體流行の趨くところがわかるものであるから、徒らに保守に拘泥せず又妄に所謂流行に驅役せられずし

て、十分(じふぶん)に趣味(しゆみ)の満足(まんぞく)を得(え)らるゝ、又(また)さういふやうに趣味(しゆみ)を涵養(かんよう)することが趣味(しゆみ)あることであらう。

胭脂(あんじ)の事(こと)。無下(むげ)に濃厚(のうこう)な赤(あか)や紫(むらさき)で眼(め)を張(は)つて脣(くちびる)につけたやうな装飾(さうじやく)をして彌(や)が上(うへ)にも白粉(しろこな)を鍍塗(くつと)りにすることは、田舎(いなか)の年若(としわか)い女性(にょせい)の間に嘗(か)て流行(りやう)したことを聞いて居(ゐ)つたが、都(みやこ)も都(みやこ)も大都(たいと)の其中(うちなか)に今(いま)も此種(このしゆ)の鍍塗(くつと)派(は)が随分(ずぶん)あるとの事(こと)だが、色の黒(くろ)いのが氣(き)になつて夜(よ)の目(め)も合(あ)はぬやうな薄(うす)ツペラな方々(かたがた)であつて、大(おほ)に塗(ぬ)る必要(ひつやう)ありと自認(じにん)したものは、女性(にょせい)は勿論(もちろん)男性(なんせい)でも塗(ぬ)つて、眼(め)も鼻(はな)も埋(う)めんばかりに粘(ね)りつけて白壁(しろかべ)の間に意(い)外(がい)に眼(め)の丸(まる)二つばかりパチ／＼させるのが大(おほ)によろしい、その上(うへ)それが少(すく)しむら消(け)え崩(ぶ)れるれば清少納言(せいしょうなごん)ならぬ他の傍觀者(ぼうくわんしや)にも一入(ひとひら)眼(め)だつて、世(よ)の爲(ため)に、健全(けんぜん)な趣味(しゆみ)涵養(かんよう)の一種(しゆい)の手本(てほん)となつて、面白(おもしろ)からうとも思(おも)へる。御當人(ごとうじん)に對(たい)しては誠(まこと)に御苦勞(ごくろう)なことで氣(き)の毒(どく)に思(おも)へるけれど、御満足(ごまんぞく)のことだらうから誰(たれ)も禮(れい)をいはなくともよからう。

第四節 家居の事

人は其心懸(そのこころかけ)の如何(いかん)によつて、外界(げがい)の大抵(たいてい)の事情(じじやう)を如何(いかん)様(よう)にも利用(りよう)し活用(かつよう)し支配(しはい)して行(い)けるものである。されど十分(じふぶん)にそこまで徹底(てつてい)せぬ多數(たうすう)のものは知らず／＼の間に外界(げがい)の事情(じじやう)の爲(ため)に制(せい)せられ左(ひだり)右(みぎ)せらるゝものである。否(いな)、人間(にんげん)といふ生類(せいるい)では、如何(いかん)ほど進歩(しんぷ)し如何(いかん)ほど徹底(てつてい)したからとて、全然(ぜんぜん)外界(げがい)の事情(じじやう)に制(せい)せられぬほどに脱却(だつてつ)することは出来(こ)ぬ。人と家居(かき)との關係(かへい)にも其消息(そのそくし)は確(たか)にある。所謂(すいゑん)、居移氣(きうつしき)といふのはそれである。

其一 四隣(しりん)の事(こと)

里(さと)は仁(に)を美(よ)しとす選(え)んで仁(に)に居(を)らずば安(あん)ぞ知(ち)を得(え)む、といふ古聖(こせい)の訓(ごん)は誠(まこと)に其通(そのと)りである。孟母(もうぼ)三遷(さんせん)之(の)教(きやう)も斯(か)かる主旨(しゆし)から施(ほ)されたのであらう。選擇(せんたく)遷移(せんい)の出来(こ)ない事情(じじやう)の下(した)に在(あ)るものは、自己(じこ)の保護(ほご)せる幼弱(ようじやく)者(しや)に對(たい)して、四隣(しりん)の影嚮(えいきやう)感化(かんか)に格(かく)段(だん)なる注意(ちゆい)を拂(はら)つてやらねばならぬ。成(な)らば漸次(せんじ)に四隣(しりん)を感化(かんか)する覺悟(かくご)がありたいものである。

其二 敷地(しきち)の事(こと)

土地(どち)の高燥(かうそう)なること空氣(きくう)の流通(りゅうつう)よきこと、此二(このふた)條件(てんけん)には必ずしも萬人(ばんにん)の求(もと)めて得(え)らるべき者(もの)では

なからうが、其一條件次にでもはまるやうに心懸くべきであつて、殊に新たに敷地を設定するものなどは十分に考慮をめぐらすべきである。

其三、家の大きさ

家屋の構造は、各人の資力と直接に關係し、殊に自我の念の大小に少からぬ關係を有し、延びて國勢とも少からぬ關係を有して居るやうである。學者哲人の中には全く居住の大小など念頭に浮ばないものもあるが、大多數の人々には、矢張り自我の大なる者は概して家屋も大きい。それが總計になつて家並みの大きい國は大抵強國である。朝鮮人中には稀に多少の貯蓄があつても汚吏の誅求を恐れて他の多くの其日暮らしと相率ゐて豚小屋のやうな矮屋に起居し一人で占有すべき空氣の容積は極めて僅少である。運河を開き長城を築きし昔は暫くいはす今の支那人といへども比較的に大きな家屋に居住して居る。歐米諸強國になると假令何階目を借りたる者にも一人で占有すべき氣量は概して前兩者に比して遙に多い。建築の精粗により外氣流通の多少により補充交代の行は

る、等差もあらひなれど概して多い。  
右は氣宇が豁達で實力あつて抱負の大なる者が自づと家居までにも其影をうつしたのであると同時に、科學的の智識が人の健康を進め少くとも損せざらしめむ爲に漸次に擴大して來たものであらう。我邦にても、學校官廳會社工場などの建築物は最少極限平均一人一時間の所要氣量九十一立方尺の見積を要するが如き規定になつて居るが、之は自我の擴張から來つたといふよりは寧ろ實際の必要から起つたのである。少くとも此位は一般にありたい。

其四、間取の事

家庭に於ては、從來間取に就いて左程顧みられなかつた。勿論他の事情が許さなかつたでもあらうが、事情が差支なき場合にも考が深く間取の問題に及ばなかつたやうである。我邦にても、東北地方の家は暗いけれども間取りが家の割合に大きい、之は寒中一家團欒の爲の必要から來たのである。西南地方の家は明るくて間取りも家の割合に大きい、之は暑中可成空氣の流通をよからしめん

爲から来たのであらう。中部地方でも農家の如きは仕事の性質上延いて間取りが如何にも不締りに出来て居る。名古屋には古來名工が居るとのことなれど、それは主として技術の上のことであつて一般の間取りに變つたところがない。京都は流石に都人の住むところとて間取りには多少苦心せしやうにも見ゆる、小さい方で概して間、たれこめて春の行方も知らぬ間に、などいふ所謂京都的要求から由来したのであらう。

慾をいへば、八つの小さな京都の間取り、又は四つの大きな北東又は九州の間取りなどよりは、一つ又は二つの大きな間に四つ又は五つの小さな間を添えるやうな方針の間取りの方が、何處にも實際生活上にも衛生上にも其他いろく見地からにも便利であり望ましくあるであらう。

家庭の不規律不衛生其他一切の不締りなどいふことは、思ひの外にも此間取りの如何に由来して居ることが少くない。

裁判官や獄吏や罪人心理學者などの談話や報告などによれば、下流社會の殊に大都會の下流社會の

間には居室の爲に衛生上其他に倅まじき弊風を動もすれば起したり又起しさうな事實があるといつてである。斯かる事柄を考ふれば社會的見地からでも家の間取りに今後随分注意をしなくてはなるまいと思ふ。

其五、裝飾の事、

イ 屋内の裝飾。家庭に於ける年少者の趣味の涵養の爲には、先づ臺所寢室居室などを整頓し、似合はしき清新の裝飾をしてやる必要である。ならば自からせしむることが一層望ましい。其他一切の家具器什は概ね家人の趣味の現れなると同時に涵養の資料となるものなることを忘れてはならぬ。

客室に至つては、其造作なり裝置なり之に添へる額面掛物花瓶置物其他火鉢煙草盆茶器などに至るまで、皆應分に趣味の働かすべきところで、傾がて幼年者の不知不識の間に趣味を涵養する資料たるものである。

玄関裝飾の如きも其銜はざる間に却て清新の趣きを籠むることが出来やうと思へる。醫師が輿望

を恢復せんとするや殊更に玄關を飾り家人の履物までをも並べて患者の受診に来るものゝ多きを装ひ、商賈が左前となり始むるや業務擴張と號して殊更に間口大なるところに移轉して虚勢を張り、景品と稱へ割引と名けて盛に顧客を引付けんとするが如き、此等は掛引上動もすれば一種の變調より所謂山が當ることありとのことなれど、確に一種の滑稽劇にして、健全なる趣味あるものゝ所爲に非ず、又其同情をも賞讃をも惹くものでない。

ロ 屋外の裝飾。白木造り茅葺きの家に、硝子窓を開けたのは、煉化造りの家に萩の柴戸を添へたのと共に、まだ日本人の眼には落付かない。所謂つぎ／＼しくは映じない。つぎ／＼しくはないものは健全な趣味の現れとはいへない。庭園殊に植込みは純然たる裝飾にして、趣味の十分に働かざるところである。

其他、籬塙塙柵など一方に實用上の顧慮を要すると同時に家の裝飾として趣味の働くべきところ

であらう。其塙邊籬外、或は近く或は遠く樹木流水平野丘陵

山嶽を、巧に展望し觀賞し得るやう、建設なり改築なりに之れ亦趣味の働かざるところであらう。

物質的文明の裏には、屋敷外の風致どころでない、僻じべさ仕業が屋敷内にさへ往々現れて来る。彼茅屋の數百年前より唯一の目標であつた雲突くばかりの檜の樺が昨日伐り僵された、船材として法外に高く賣れたと非常に喜んで居るとの語。此祠の幾百坪を蔽つて居つた幾抱えの樟の樹が今日賣約濟になつた、明日からは鋭き鑿に根ごし幹ごし掘り伐りとられん筈、樟腦の需要が多くなつたから素敵に上直に捌けたのだと大層うれしがつて居るとのこと。併し之が爲に最早、小禽も來鳴かない、微風も囁かない、鬱たる樹蔭に儼然として暢神することも出来ない、森然として一種の威嚴に觸るゝよすがもない、誠に精が抜けたやうな光景になつたなどと心ある者をして感ぜしむるをば近時往々遭遇することである。場所を辨へず歴史を顧みないものはと淺猿しいものはない。

社會の各方面に注意して觀察すれば此様な遺憾は少くない。いふことを好ましく思はないが、必要

あるを認むるから、社會に於ける趣味涵養の章で  
今少しく述ぶることしやう。

其六 別荘の事

近時、身分あり資力豊なる人々は、静閑なる地  
域、風致ある地方に、社會の劇務から暫し退いて  
休息し自適すべく、別荘を建築するものが益々盛ん  
なつて、骨て閑静な土地も雜閑になり曩に風致に  
富んだ土地も殺風景になつたにつれて、益々他の  
静閑幽邃の地域に翫食しつゝある。此等の人々の  
趣味深き苦心の建築をして、番に其人々の休息自  
適に應ぜしむるに止めず、直接には些の關係を有  
せざる其地の住民をして此建築に依り従前風致あ  
りし其里に更に趣味ある一亭を生じたるが如き感  
想を以て朝夕觀望せしむるやうにあらしめたい。  
斯の如くにして、彼の素養なく美趣味なき、自身  
の金で自身の爲に建つること故誰にも參酌なしと  
いふ態度なる今分限者などが、押強くも専門技師  
の設計をさへ顧みず、思ひ付き次第に伐り開き埋  
め崩し建て並べて之が爲にいたく從來の風致を損  
ぜしめし近頃の弊風を、漸次に救濟したいもので

ある。





龜の兒頂戴

かはぐち

浦島太郎の繪を見ると、大抵には、其乗つて居る龜の耳を恰も仔猫のそのやうに描いて居る併し實際龜にはあのやうに角の立て人目につくやうな耳がない。又尾の方に大層な簀のやうなものを曳いて居つて丸で人の鬚の叢生したやうに髮毛か肉條かが生えて居るやうに描かれて居る。けれども實際おれは龜の體に必ず生ゆるものではなくて、唯長命して居る間に其甲殻に苔や海藻が生えて、龜の泳ぐにつれて後方に曳いて居るのである。それを奇麗に繪に描いた丈であつて、實物には不規律に海藻の長いや短いのや緑の苔や褐色の鹿角菜のやうのや、嫁皿貝や殊に牡蠣などは澤山にひつつて居る。

夜のまだ明けやらぬ三時頃、黒鯛釣船に乗つて磯を少し離れて、釣塲所をソツトすかして見渡すと、六七間彼方の小岩がツブ／＼と徐ろに見えなくなることもある。見れば十間許向ふの小岩も亦

沈みつゝある。靜に漁師に尋ねると、それは龜様だといふ返事が極めて恐ろしうに遠慮した聲である。成程其龜が水面に出して居つた甲の大さ丈でも一坪位の面積を占めて居つた。實は夜の明けない間にスカシ見て、少々大いから氣味がよくない全體を現はしたら四疊敷もありさうな龜に睨まるゝと假令敵意のないものとは知りながらも、場所場所は場所なり時は時なり、何だか油斷のならぬやうな感がする。但し漁師共は龜の性質を知つて居るから別に怖るゝわけではないが、唯彼等の間の風習として龜を割合に尊敬して居るのである。

併し海龜で普通に大きいといはれて居るものは幅三尺長四尺ばかりの甲殻を負ふたものである。即ち普通の疊一枚より少し短い位のものである。此位の龜ならば、時機によりては陸上で目撃することが出来る。彼等の産卵期には日御崎から田邊灣へかけての海濱で、濱邊の若者などに捕つてイデチメられて居るのを實見したことが度々であつたが、捕へるといつたとして一人二人や三人で捉たとて、龜公逃げやうと思へば平氣で逃げ出す、三人

位なら負ふたまゝで逃げる、少しでも波のかゝるところに歸れば最早人力では何とも致方がない。夫故に若者共は陸上……といつても濱の真砂の上……で發見したならば、龜の油斷を見計つて押でこねて之を裏返す、腹背ひつくりかへれば大方の龜公も全く力の出しやうがない、手を出さば敵かち、足を出せばうたるゝ。仕方がないから、急に逃亡の野心も出さずに、静にして居る。若者共は力自慢に此龜を提げやうとしたり擔いでみやうとしたりして、嬉々としてなぐさんで居る。中には此龜を捕へて屠つて、肉をとり甲を賣るを商買にして居るものも稀にはある。肉は滋養に富んで居り甲殻は鱈甲ほどに上等でないけれど様々に利用せらるゝから、相當の利益があるであらうが、併し此殺生は多數の人々に嫌はれて居る。殊に老人などは何時も捕つた龜をかばつて、買ひとつてでも逃がしてやる風になつて居つて「龜屠りは決して仕合よく暮すことが出来ない」といふ口傳が出來それが自づと龜の保護法になつて居る。

頃は陰曆五月の中頃、麥秋の拂曉、鳥よりも雀

よりも先きに起き出て、麥藁の間を露踏み分けて濱の松原に出て、木立を楯にとつてソツと濱の波寄する渚を見渡すと、静かなる夜明けにも捲いて来る浪ばかりは、サラ／＼と神氣のセイ／＼する獨語を繰返して居る。シャブと異様の浪の響が吾輩の隠れて居つた木立の直ぐ下なる低平な沙上にしたと、氣づいて、微明にすかして覗へば、確に注文通りの龜である。大さ方四尺にあまるものである。其不恰好な頭を延ばして、前後左右を警戒しながら見廻はして居る。斯くて五分許も經つたと思ふ時分に、愈龜さんノソリ／＼と沙上に上つて來た。誠に大當なもので、其ギロ／＼見廻はす眼付が薄氣味わるいほどであつたが、頓がて、波際より二尺許のところの靜に蹲つた。熟視すれば、後脚で真砂を掘つて居るやうすである。頓がて可なりに大きな筈の十分嵌りさうな大さに掘り込んだと思はしい頃、掘方中止をして暫し落付いて、それから其穴の内へ、彼の尾のあたりから何かをコロ／＼と落とし込むやうである。その又薄黄色の球が追々に穴に填みちて來るやうすである。

さうかうする中、潮がさして来て、龜の尾に波がかゝる頃、コロ／＼が出でなくなつた。龜は再び起つて又水際より沙上を斜に二尺あまり、高さにしては三四寸の處に匍ひ上つて、再び穴を掘り始めた。其中早や先さの黄色なものを入れ込んだ穴が、波の爲に砂をかけられて、丸で平に一面の沙上となつた。茲に至つて、吾輩は、實地見分の爲に今少しく龜さんに接近しやうと苦心し始めた。龜さんの第二回目の穴もそろ／＼完成に近いで熱心に掘つて居らるゝ、到頭復た靜に座つた。復たコロ／＼か、然らば其コロ／＼は何物ぞそこで。吾輩は極めて靜に一大迂回をなして龜さんの尾の方向、約三百米突彼方に出で、拔足差足、龜さんの方向に近寄つたのである。近寄つてみれば、全く龜さんは俯いて熱心に黄色なものを落しつゝある。假令多少吾輩の沙上を踏む恐び足の響に不審を感じて左右を顧みて偵察するにしても、龜さんには氣の毒だが吾輩には至幸至福なことには龜さんの甲が高いので後の方へば展望が十分には利かないのである。夫故に我輩は思ひの外にも龜さ

んの直ぐ尾の側まで接近することが出来たのである。見れば龜の甲といはんよりも磯の岩といふ方が適當でありさうに海藻や貝殻がついて居る。後脚や尾の表面は眞黒な石垣のやうに見ゆる。連も東京あたりの縁日に賣つて居る水龜や、大阪天王寺の堀に飼つて居るそれや、山奥の獵師の腰に吊つた火藥筒などになつた甲殻くらゐを見た丈の人には一寸想像に浮べにくい。其五稜廊の石垣のやうな後ツ尾のあたりから、見る／＼うちに、コロ／＼と落ちつゝあるのを今見れば、鶏の卵に比べては少し小さいまざるい李か杏のやうな黄色な卵である。序のこと故、御免を蒙つて、豫て携えて居つた小深い籠を巧に龜さんの掘つた穴に嵌めて、最も輕便に、龜さんの尻のところへ箆の口を受けておくと、龜さんの尾のあたりがブツリと音がしたと思ふと眞圓い黄ばんだ卵がコロリと籠の中へ落ち込むブツリコロリと音のまに／＼五十ばかり生んだが、未だ止まぬ、百あまり生んだが未だ止まぬ、吾輩は初めの中こそ、之が研究だとか實驗だとかいふ念慮が強かつた爲に別に何

とも思はなかつたが、考へて見れば龜のかいどの  
 わたりから落ちて来る玉をば、自分は今策を捧げ  
 て、所謂龜の兒頂戴をして居るのだといふにも  
 思へて少しイヤになつた。併し學校の先生あたり  
 から、なる堪忍は誰もする、ならぬ堪忍するが堪  
 忍、と教はつたことを思ひ出して、辛抱して、通  
 計二百八十三個目の卵がコロリと落つるを認め  
 刹那に、「オイ僕にも受けさせ」と唐突に小聲にい  
 ふ者があつた、小聲ではあつたが、四邊が波より  
 外に音のない拂曉のこと故、吾輩はハツと思つた  
 が、見れば日頃の腕白連の一人であるから、眼く  
 ばせして暫し待たさうとすると、彼腕白奴「さう  
 なら僕に其策のまゝに受けて見させて呉れ」とね  
 だるから、平素謙遜な吾輩は茲でも亦靜に友人と  
 交代して策をそのまゝ彼に手渡してやつたが、受  
 取つた友人は、ブツリと音のするのを珍らし  
 がつて黙つて大恐れで策を差出したと見えた其一  
 瞬、誤つて策の縁がコツツ龜の尾に當つた。流  
 石の龜さんも、やつと氣付いて少し怪しいと思つ  
 たものか、スーツと異様の空氣を洩すと同時に慌

て、ドサと浪際から海の中に逃げ込んで終  
 つた。後に残つた友人は失望した様子で切に吾輩  
 に申譯をするから「ナニ君は御しまひまで受けて  
 くれたのだから御苦勞であつた」と感めてやると  
 彼吾輩に向つて言ひにくさうに、「僕にも少し此卵  
 を分けて呉れ」といふ。吾輩はそこで試に彼に對  
 して「君が受けてから幾個産んだか」と問ふと、  
 彼れは唯の三個で四個目が玉でなくて異様な風で  
 あつた」と正直に答へた。そこで我輩は「承知し  
 た、龜の産んだ半分をやる」といつてやると、彼  
 友人眼を丸くして此半分も僕に呉るか」と驚喜  
 の態である。そこで吾輩は念を推して「此半分で  
 ない、彼の龜の今朝生んだ半分をやるのだ」と申  
 聞けて、少しシャブの、水際に入つて、前刻の  
 第一回の産卵場にして今の全く平面となれる沙面  
 をさぐつて、其友人と共に砂掘り分けて拾ひ出し  
 たのが三百十四個。前後通計六百個。約束通り半  
 分宛にして一人前三百個。分配結了して、扱相携  
 えて歸らうとして見上ぐれば、まだ日は出ないが  
 並樹の松では小鳥が早や起て居る。漁師共は早や

網の整頓をするやら、遠く海上の色見をして居るやらで、チラボラ行き交ふて居る見付られては不ダラル、かも知れないと早速二人は逃ぐるやうに走せ歸つて、假寓に入らうとしたが、途中、其友人の建議に基き暫く友人の假寓なる前栽の砂場の一隅なる日當りのよいところに穴を掘つて、人知れず軽く埋めて隠しておいた。實は處分法の困つた結果であるのである。

後日濱に通つた堀河の岸で女兒供や年寄等が寄集つて、何か賑かな様子である。行つて見ると、二錢銅貨ほどの龜の兒に一々酒を飲ませて水に入れてやる老人が群集に蹲つて居る。全く友人の寓所の隣の老人であつた。一つ二つと籠の中から數へつゝ、飲まして放す。放され仔龜は一旦沈んで必ず一度水面に頭を上げて再び沈む。それから復と浮いては來ない。老人は説明して、龜が放してもらつた御禮をいふのだといつて居る。後年に至つて考ふれば之は龜が陸上で呼吸して居つたのが急に水中で呼吸が苦しいから一寸水中呼吸に慣るゝ

までに一息吹きに來るのであることが分つたが、當時は其老人の説明を感心しつゝ、聽いて居つた。其中龜についていろ／＼な質問が八方から其老人に對して起つたが、何故近頃此近傍に龜の子が多いのだらう、といふ質問に對して老人が「ドウも分らぬが今朝など隣の垣根から三十も四十も連れて匍つて來た」と語りつゝ、砂まみれの仔龜を「これもさうだ」などいつて放して居る。之を聞いた一瞬、吾輩は一目散に例の友人の假寓に駆けつけて相携えて前日の砂場に行つてみると、卵は全くない、あるものは薄いその皮ばかり、考へてみれば僅に十日許の間に地熱と太陽の温度丈で十分に孵化して、被つて居つた砂を押のけて總員六百思ひ／＼に解散してしまつたのであるらしい。斯うと豫め知つたなら少しは工夫つゝあつたものと思へど、今は詮方もない。二人は小供心にも馬鹿々々しくして、黙つたまゝで、眼を圓くしたまゝで暫し詞も出なかつた。

人の話を聞くととはなしに聴けば、龜は全く自然の温度で孵化する。産卵の後一週間にして確に化



する。化した仔龜の大多數が濱の砂倉から這出で、直ぐ海中に泳ぎ出で、或は章魚に喰はれ鯛にくはれて、生立つものは誠に少い。それで卵の數の多い割合に、海には龜の數が少い、といふ話である。六七月の候、汐干狩に磯に行つた時、注意して見たまへ、稀には可愛い龜子君の泳いで居るところもあらう。

以上、龜の兒頂戴に關する話、如件。淡水に産する水龜又はスツポンなどの習性などに關しては別に項をかいて話さう。

# 喜多方行

川口 得

命を承けて、七月十三日より數日間、保育に關する實地指導の爲、福島縣下喜多方町に赴きしてとあり。

郡山より出で、岩越線の鐵路により、西に向へば、汽車は堀の内安子が島を經て熱海に進む。阿武隈沿岸の平野茲に盡きて、群山漸く路に迫る。中山峠にかゝれば、道の勾配急にして汽車の歩みゆるやかなり。數分間の暗をたどりて其の隧道を抜ければ、山いよく深くして墻壁をなし、大小の瀑流かして此處に懸りて、風、夏を洗ふ。此邊、冬日雪よけの爲にとて造られたる、板がこひの隧道路様のものの、今も残れるはまた異觀なり。

山瀧、關のと、川桁はなほ山路ながら、猪苗代より翁島に至る間、田甫や、開けゆきて、峠に生いたる櫨の木、繁りみどり深く、其木がぐれに、折々のぞむ猪苗代湖は、漣波はるかにしてさながら海なり。磐梯山は北の方にて、雲際に聳えたるが、

所々、土あらはなる麓のけしきはいと眼近く、良瀬川を隔て、のぞみたる景色比なし。

若松はさすがに人家稠密にて、めあたらしき建物も多かるが、古城の跡も飯盛山もたゞ彼方ぞとのみにて、汽車は市の北端を過ぎてゆく。

之より西北の方に向ひてなほ平の中を進み、鹽川といふを經ば、郡山より四十五哩餘の鐵路ここに盡きて、乃ち喜多方町なり。

喜多方町は、會津平の北方につきんとする所にあり。羽越の諸山相交りて、小屋森、黒森、日影、夫婦、加納、高曾根、等の雄峯、たゞ一帯をなして、近く西より北に亘り、分水の諸嶺亦東南の方に、やゝはるかに延びたり。

山、いづれも青ければ、木々の下露岩も水も、また豊かにして、幾十條の細流は、清く人家を縫ひて走る。

周囲の田甫廣からざれども土黒くして稻、麥、蔬菜、特に桑の栽培に適したるが如し。

人口千許。喜多方は、實に若松と相對して、會津平に於ける一中心なり。

商業は、古來この地の主なる生業なりけるが、近時は、有司の奨勵によりて、特に製糸の業に従事するもの多きを加へ、規模宏大なる製糸工場各所に設けられたり。

家富みて生計豊かなれども、人皆勤勉にして、中流下流もしくは上流のものに至るまで、婦女も悉く此の製糸の業に従事して、家に徒食するものなく此婦人の活動盛にして而も健全なれば、一般の風俗もかのづから純潔なり。

此町に幼稚園あり、喜多方幼稚園といひて、同情會といへる婦人團體の設立する所なり。同情會といへるは、此地に於ける唯一の婦人團體にして、一千餘の會員を有す。元來會員は、貴賤老少となく、しばしば相集まりて、智を磨き徳を修め業につとめ相歡悞するを例として、苟も生計の餘暇を徒らにせざる、まことに比び少なき美風あり。

之等同情會員は、また悉くかの愛國婦人會員にして、恰も同情會といへるは、喜多方に於ける愛國婦人會の半面なるが如し。

かくて、此園体は、三十七八年戦役の當時、軍人遺族殊に其幼兒を數多收容して養護し、其功績も少からざりけるが、戦をさまると共に、其の事業も要なくなりければ、更に戦後の紀念として、事を選びて、此の幼稚園を設立するに至りたるなり。爾來三ヶ年に亘りて、此の幼稚園は、たゞ同情婦人會員が月々各自に支出する、僅少の會費のみを以て維持せられ、以て今日に至りたれば、規模素より大ならず。

いろに別れたれたる二ヶの保育室。  
遊嬉室と唱ふる一ヶの室。  
保母室。小使室。昇降口。便所。のむとさきも、狭くかつ粗造にして、辛うじて其用を便するにといなり、

遊園また十數坪にして、かりそめの花壇、砂場の外は何の設備を施さんに殆ど所なきが如く、園外に、町の公園を稱して二十七八年の戦役の紀念碑など建てられたる、さゝやかなる空地のあるを利用して、園兒の遊ぶにまかせ、僅におふるゝを免れたり。

園兒百名は、二組に分たれて、三名の保母は、其の保育の實際にあたり、一名の下婢ありて雑務をとる。

園長を原平藏氏といふ。喜多方町長にしてまた同情婦人會長たり。明治の初、政界の混沌たりし頃、錚々たる志士として、幾多の辛酸をなめられけるが、一朝脱然としてこの喜多方の郷に長となり、茲に殆ど二十年、殖産に興業に一般の教育に、實績を挙げられけるは言はずもがな、幼兒保育の上にも、また甚だ熱心にして、かのれが此地に赴くに至れるも、實に、原氏が此園の長として我が高嶺校長に、切に圖られけることありけるが爲なりけり。

設備の不完全は此の如く、其の保育の方法に於ても、未だ熟せざる所なししがたけれども、園内外の、常に清潔に取なされたる。幼兒の純朴にして可憐なる。又、其幼兒が世に比ひなく保母を慕へる。等見るからに快よく、先づ當事者が、勤勉熱誠の程の現はれたるもうれしきに、此の如く熱心なる園長を頂き、篤志なる幾多婦人會員の後



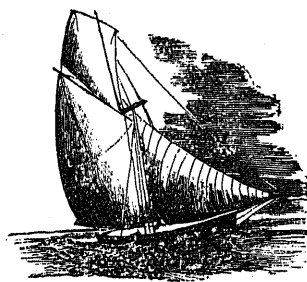
援ある此の幼稚園が、前途の發展は決して想像しがたきにあらずと覺ゆ。

このれ、數日の間此の地にありて、朝には慈母の如き保姆と共に、純朴可憐なる幼兒と伍して生活し、夕には、數多の熱心なる地方教育家諸氏と交りて其の道を語り、うち仰ぐ青山の姿も、袖濡らす涇流のせゝらぎも、只、歡樂の色と見、聲と聞きて飽かざりき。

保育の事、理に於て欠くべからざる必要ありて、而も、實績未だ世に普からず、幸に、此かる邊境の地に於て此業の發展を望み得たるよろこびと共に、記し置きて後の思出とせん。

記者白す

本會幹事川口氏該地に逗留中は園長原氏を主とし其他一般人士より同氏に致されたる歡待頗る厚く本會の深く感謝する所なり茲に謹んで謝意を表す





おいしいお甘薯……………お話

高千穂學校主事

伴 茂樹

客月神田青年會館に於けるお伽俱樂部例會に於て談話したる  
梗概なり。女子の武士氣質を鼓吹す。

今から大抵七八十年程前、岩代の國會津と申すところに、大層な  
飢饉がありました。其の時分、丁度會津の町から三里ばかり離れ  
た田舎に、或るお侍さんの家がありました。其のお侍さんは、別  
に殿様におつかへ申して居るのでもなく、只の浪人であつたもの  
ですから、毎日近所の子供を集めて、本や算術などを教へ、やう  
く朝夕の細い煙を立て、居ました。ところが「親切な先生だ」  
「よい先生だ」といふ評判が、だん／＼村中に響いて参りました  
から、習ひに来る子供も大層多くなつて、中々賑やかに暮せる様  
になつたのです。其處へ丁度飢饉になりました、初めの中は、お  
弟子だちも参りましたが、段々と方々のお家では、子供を手習に

出しておくどころではなく、眼を見ては山に登つて、薪をとり、葛の根や草の根を掘り、木の實をとらせなどして、お稽古などにやるどころではありません。それで、今日も一人へり、あしたも二人へりといふ様な工合で、遂々みんなさがつてしまひました。お侍さんも初めの内は、今迄貯へてあつた物で支へて居ましたが、日数がたつのに従つて、段々に食べるものもなくなり、高きから、高きでお金でお米を買ひ、お金もぢきになくなり、その外のお道具を賣り、箸筒を賣り、其の外つて居りましたが、しまひには最早品物もなくなりました。

此のお侍さんのお家には、梅ちゃんといふ八つになる子と、一郎さんといふ五つの子と、去年生れた赤ん坊とがありました。此の三四日食物らしい物は少しも口に入れませんから、飢を訴へてヒヒと泣きます。今日といふ今日は、もう米櫃の底を拂つて、これにお芋の切れ端を混ぜて、お粥をこしらへ、自分たちはたべず、小供たちに食べさせ

て下さいました。けれ共満足な食べ物でありませんから、夕方になると従つて、だん／＼と腹がすいて来て、いつもの通り泣いて食を母に求めます。お梅さんは大きいので、もういくらせびつても何も食べるものはなく、却つてお母さんをお困しめ申すのである事を知つて居りますから、初の中は飢をこらへて何も申ませんでした。もうこらへかねて、弟と一所に母にせがみつきます。赤ん坊は、母の乳に一生涯懸命にかぢり付きませんが、日頃充分の食べ物がないのですから、しなび切つて僅ばかりも出ません。お梅さんは、實に此の世ながらの地獄の様な心持で、最早子供等と共に飢死と心を定めました。如何にも行末のほかない事を思ひまして、二人の子供のかつえ泣くのを見て、涙の瀧は、とめる瀬がありませんでした。其の中に子供たちは、泣きくたびれたのでありませう、其のまゝ、瘦せた紅葉の様な手を枕にして、かすかに哀な聲を出しながら目を閉ぢました。母は今まで少しは五月蠅いと思つて居ましたが、今更だ瘦せては居ますが、がんぜない神の様な子供の

寝顔を見ますと、却つて哀れさが増して参ります。暫く其の寝顔を打ちまもつて何か考へて居ました。が、やがて思ひ付いた事のある様に、太く低いため息をつきながら顔を上げました。其の顔色は青く、大變淋しく、そして、云ふにいはれぬ苦痛の色が現れて居ました。静に立つて奥の押入のわきで、何かゴト／＼として居られましたが、愈々決心したといふ様な様子で、臺所にあつた古い手拭を頭から頬被りをし、そつと水口の戸を明けて外に出られました。外には中空に秋の月が鏡のやうに澄み渡つて、心の底まで透き通されるやうでありました。外に出たお母様の手には、一つの鍔れかゝつた箒がありました。あゝお母様は其の箒を持つて何をなさるのでありませうか。

\* \* \* \* \*  
お母様は月に射られて心に譴がある様に、徐々とうつむいて歩いて居りましたが、其の目には絶えず月明りにも、憐な露のやどりが見へて、口からは大きい吐息をして居られました。だん／＼進んで、

ある家の生垣の前で、はたと歩みをとめました。が、其の時お母様のからだは、ぶる／＼と振へ、目の露の宿りは、五つ六つ地の上に落ちました。お母様は何をなさる積りでせうか。一寸あどさきを見廻しながら、生垣の破れから、中にはいられました。生垣の中には、一面にお芋が生へて居ました。お母様は暫く考へて居ましたが、やがて畑に向つて一禮をし、蹲つて息をはづませながら、何やら籜の中に入れて居りましたが、まだ中程にもなりませんのに、立ち上り、又畑に一禮して元の垣を抜けて外に出ました。お母さんは十二三歩ばかりは急いで馳けて來ましたが、其の時叢雲に覆はれて居た月が、一段と輝きはじめまして、其の光をわびたお母様はハタと立ちどまつて、心中に考へられました。今このお芋を兒供等にやれば、さぞ喜ぶであらう。さぞうまがるであらう。けれ共之はよその畑のものを取つて來たのである。親の身として、たとへ餓に死んだとて、他人のものをとつて自分の子供にたべさせやうとは、あゝ如何にも恥かしい淺墓な考であつた。いつそ

これは元のところにお返しして来やう、それがいと、二歩三步あともどると、不意に木陰から一疋の犬が出て来て、お母さまに、二聲三聲ワン

と吠え付きました。あらく／＼犬でさへ此の通りに咎める。實に恥しい事だ。と考へて、元の垣の破れ目のところまで戻つて参りましたが、又考へますのに、今此の儘に何も持たずに家に歸つたならば、矢張り子供等は餓に泣くであらう。何となしに子供等の聲が耳につく様だ。早く持つて行つてやりませう。と今度は急ぎに急いで、自分の家の水口のところまで参りましたが、水口に手をかけて、中にはいらうかどうしようかと躊躇してゐましたが、度丁その時、家の中で、小さい子のシク／＼泣く聲が聞えたものですから、お母様はもう前後の考もなく、夢中で家の中にはいつて、小さい子のそばに行つて、そつと床の上からたいたいてやりますと、又スヤ／＼と寝入りました。お母様は、今とつて来たお芋を洗ひませうと思つて、箆の中をしらべて見ますと、お芋よりも、草や土の方が多く、お芋はたつた三本しかありません

んでした。お母さまは、急いで其のお芋を洗つて、小さく切つて、水で之を煮はじめました。

ところが、子供等は初めから、餓にこがれ、泣き疲れてねてゐるのでありますから、今お芋のよい香をかいで目を醒まし、みんなお母さまの側によつて来て、「お母さん何？、お芋？、私にも頂戴な!! 早く頂戴な!!」といつて、まだよく煮えないのにそばから／＼お母さまにもらつてたべておました。その時の子供達の顔は近頃にならぬ嬉しさうな賑やかな顔で、お母さまは久し振りに子供の嬉しい顔を見ました。そして子供たちが、皆お芋を手持つて、「おいちいねー」「うまいねー」といつて居りますとき、奥に書き物をして居られたお父さまが出て来られました。平生の聲で、「そのお芋は？」と尋ねました。お母さまはその聲が雷の様

に聞へたのでありませう、首を垂れ、ふる／＼身軀をふるはせて居られました。お父さまは大概は様子でお分りになつたのでありませう、僅に怒り

の色を現はし、顔には絶え難き苦痛の涙があふれ、  
太く力ある息をしながら、嚴かな調子で、

「そなたは情無き事をしました。そなたがその  
様の事をするとは思ひませんでした。人間は困  
難の極點に遭遇しなければ誠の心は知れぬ者で  
ある」

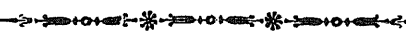
と申しました。之を聞きましたお母さまは、そこ  
に泣き伏し、小供の愛にひかされて、つい人倫の  
道を缺きました事をいろ／＼に詫びまして、殘の芋  
を持主に返す事まで申し出しましたが、お父さま  
は中々お聞きになりません。お母さまも覺悟の色  
を表はし、最早此の場合になりました。子供等  
に見苦しい餓死をさして長き苦痛を見せ、死後ま  
でも人の口にかげますよりも、一時の苦痛を忍ん  
で……これ私も豫て覺悟は定めて居ります、と

いつて兩の肌をぬぎますと、肌には先程着かへら  
れたのでありませう、白い肌着をつけ、肌着の背  
中には、南無阿彌陀佛の稱號さへ書いてありまし  
て剃刀まで壞中して居られました。お父さまも妻  
の斯程のけなげな決心に感心され、朽ちても腐れ

ても武士の片われ、小供等も不憫ではあるが、こ  
れも前世の因縁といひながら、暫し小供等の手を  
握つて黙然として居られました。今まで、お芋の  
味に舌鼓を打つて居ました子供等も、此の騒ぎに  
あきれはて、開いた口もふさがらず、お芋を板の  
間に落し、意味もなしに涙を流してゐました。煮  
かけてあるお芋は、水がなくなつて、ジイ／＼と  
こげついでゐました。

お父さまはやがて奥から刀を持つて來られ、子供  
等に因果を申し含め、淋しく冷たき最後の笑みを  
浮べて、今や一人の子供を刺さうとしましたとこ  
ろに、不意に水口の戸を蹴外づして、三人の若い  
男が飛び込んで參りました

「わあお師匠さん、お待ち下さい、まわい……  
私達は芋畑に毎夜々守をするものですが、毎  
夜ぬす人がはいつて來ますから、油断なく守つ  
て居りましたところ、今宵一人の女の人がはいつ  
て來ましたから、私達が様子を見て居ります  
と、其の人は絶えず涙を流し、畑にお辭儀をし  
ながら、箆に一ぱいにもならない中に逃げて行

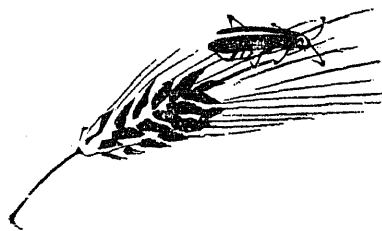


く様子は、心からのぬすみとも思へませんから、後について参りますれば、お師匠さんのところの奥さんでした。其所で私共も一時はおどろきました。が、お師匠さんの奥さんともあるべき方が……と誠に見下げはて、暫、中の様子を伺つて居りましたが、只今の一分一付で残らず私達の心に感動いたしました。始て之こそ眞の侍と思ひました。此の村に、お師匠さんの様な方が居らつしやるのは大變村の名譽で御座います。どうぞ不覺な事をなさらぬ様に、皆さんのお困りにならない様に、私達が引き上げ申しました……」

甲「オイ權助、お前、村長さまのところに行つて来い。乙「おれは八右衛門さんのところに行つて来やう。」

といふ譯で、其の男達が村中に云ひふらしたものですから、此飢饉の中にもかゝはらず、あちらからはお米、こちらからはお芋、あそこからは粟を、といふ工合で、一日の中に、庭先に二三ヶ月程も支へられる程の品が集まりました、其れから後は、

親子四人は、何の變りもなく豊に暮したといふ事でありませぬ。めでたし〜〜



# 月刊産科婦雑誌

購読希望者は日本産科婦協會員となり、一ヶ月分會費前金壹圓を納入せらるゝ時は毎月配本すべし

本誌創刊以來茲に九年時勢の趨向に鑑み一大刷新を加へて世に見えんとす産科婦雑誌中實際問題に對し指導者たり顧問たり得るもの本誌を措きて他に求むべからず二段組十八行の植字は自ら内容の豊富を語り時論、原著及實驗、家庭衛生の諸欄盡く讀むべし殊に時論及講義に至ては窃に本誌の特色として江湖に誇る所敢て大方の一讀を待つ

(講義)は正科として産科婦學(産婆學)及び看護學を連載し遠隔の地に在る人尙高等産科婦養成所の講筵に參するの思ひあらしむることに試験準備の諸姉に對しては無二の良師友と謂ふも強ち誇大に非ざるべしと信ず

明治四十一年六月

東京市日本橋區濱町三丁目七番地  
産科婦人科楠田病院内

## 發行所 日本産科婦協會

〔電話浪花一六〇番〕

フレイベル會發行

### 幼稚園遊戯

定價 金四十錢  
會員特價 三十錢  
郵 稅 四 錢

幼稚園の爲めに編纂され幼稚園の爲めに出版されたものは本書が始めてであります。世の幼稚園に關係せらるゝ方々は是非一本を座右に備へられんことを望みます。尚本書には女子高等師範學校内にて作られた幼児用唱歌の歌曲並に同校附屬幼稚園に於て現今採用せらるゝ保育要項とを附録として採録致しました。

フレイベル會發行

### 幼児談話材料

定價 金四十錢  
會員特價 三十錢  
郵 稅 四 錢

世に行はれて居る多くのお伽話は幼児教育に不適當なものであります。本書の内容は特に幼児の爲めに作られたもので幼稚園時代の幼児に最も適當なものを集めてあります。家庭間の贈物などには最も妙なるのみならず、苟も幼児教育に關係して居らるゝ方は是を標準として作話せられんことを希望致します。



# ●●豫約募集●●

フレイベル會編纂

## 幼稚園遊戲的 手工圖形

右は主として幼稚園に於ける手技及小學校の初學年に使用せらる可き手工の圖形參百餘個を蒐集したるものにして新教育主義の實現上必要なる教材書なり。本會は特價金壹圓を以て五百部を限り豫約募集す希望者は至急申込む可し。但し應募者既定數に満たざる時は出版せざる可し。

定價

金壹圓五拾錢

郵稅

未詳

東京女子高等師範學校内

明治四十一年八月

フレイベル會